

海を飛ぶ夢

2005(平成17)年3月3日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



監督＝アレハンドロ・アメナーバル／出演＝ハビエル・バルデム／ベレン・ルエダ／ロラ・ドゥエニャス／マベル・リベラ／セルソ・ブガーリョ／クララ・セグラ（東宝東和配給／2004年スペイン・フランス合作映画／125分）

……人間の「尊厳死」をテーマとした実在の物語。家族に支えられて26年間、主人公は手も足も動かせないまま、ベッドの上だけで生きてきたが、遂に尊厳死の決断を！ しかし、その実行は……？ 重々しいテーマながら、2004年ベネチア映画祭で絶賛の拍手を浴び、第77回アカデミー賞でも最優秀外国語映画賞を受賞！ 重要な法律問題と宗教問題を含め、人間の生きることの意味を根底から問う感動作に拍手！



「尊厳死」の可否は？

本来の意味での尊厳死とは、人間としての尊厳性を保った状態で死に至ることをいう。そして、それは人間なら誰もが望むことだが、この映画が描く尊厳死は、尊厳死を実現するために何が出来る（許される）のか、という難しいテーマ。

尊厳死を認めるべきか否かは1つの法律論だが、それ以上に道徳論や宗教論も大きなウエイトを占めている。人間が自力によって尊厳死＝自殺を完成させた場合、法律論としては誰もこの人間を裁くことはできない。また、仮に失敗した場合（未遂）も、法的にこの人間を処罰することはできないものとされている。

しかし、この映画の主人公ラモン・サンペドロ（ハビエル・バルデム）のように、意識は正常人だが、肉体的に手足が動かず、生きていくためには他人の援助（介護）を受けなければならないため、自力で尊厳死（自殺）をすることができないような場合、このラモンは尊厳死の権利すらないのだろうか？

そして、このラモンの意思を合理的なものとして尊重し、彼の尊厳死の手助け

をすることは、殺人幫助罪となるのだろうか？ この映画は、そんな生々しい尊厳死に伴う法律問題と宗教問題を実話にもとづいて問題提起するとともに、何よりも人間の生きることの意味を問う超話題作だ。

これは実話にもとづく物語である！

この映画の主人公ラモン・サンペドロは、1943年生まれの実在した人物。そして、パンフレットによれば、19歳でノルウェー船のクルーとなって世界を回ったが、25歳の時、引き潮の海に岩場から飛び込み、海底で頭を強打したことによって、首から下が不随となった。以降、家族の介護を受けながら生活したが、26年目すなわち1994年、彼が51歳の時、尊厳死を決意。自分1人ではその「実行」ができないラモンは、その後裁判所に対して尊厳死を求め、これを拒否する法律制度と闘うことに……。この彼の闘いは、尊厳死を法的に支援する運動団体の支援を受け、国内外のメディアで大きく取り上げられたが、結局裁判所は彼の願い（要求）を認めなかった。他方ラモンは、1996年、ベッドの上で書きためていた詩や文章をまとめて、『LETTERS FROM HELL』という本を出版。その2年後の1998年1月12日、周囲の人間が罪に問われない方法を考慮したうえで、自身の人生にピリオドを打ったとのことだ。この映画は、この実話にもとづく物語がすべての人間に対して問う意味を静かに、大きな迫力をもって観客に示している。

こんな家族は滅多にいない？

ラモンの介護をするのは、主に兄嫁のマヌエラ（マベル・リベラ）。そして、父親のホアキン（ホアン・ダルマウ）と甥のハビ（タマル・ノバス）。このマヌエラ、ホアキン、ハビは、ラモンの尊厳死を認めていた。しかし、一家の生活を支えるため農場で働いている兄のホセ（セルソ・ブガーリョ）は、人間が自らの意思で死ぬことなど絶対に認めないという立場。そのため、再三ラモンとやり合う場面も……。しかし、これは価値観の衝突であって、兄弟の愛情が浅いわけではない。むしろその逆で、この家族たちの献身的で温かい愛情のおかげで、ラモンは半身不随になってから26年間も生きてくることができたわけだ。こんな家族の介護に恵まれることは滅多にないはず……？

ラモンをめぐる3人の女性

ラモンの尊厳死をめぐる映画には3人の女性が登場する。尊厳死を決意したラモンが最初に接触したのは、尊厳死を法的に支援する団体の活動家のジュネ（クララ・セグラ）。これと同じような団体が日本にもあるのかどうか私は知らないが、こんな団体があること自体にビックリ。そして、ジュネが明るく前向きかつ献身的に、このような活動に参加している姿は感銘を受けるもの。

ジュネがラモンの尊厳死についての法律問題をクリアするために応援を求めたのが、自分自身も不治の病を宣告されている女性弁護士のアリア（ベレン・ルエダ）。アリアに要請されることは、ラモンの尊厳死を手伝うことを殺人幫助とせず、合法的なものにすることだ。裁判所に対して、ラモンがなぜ尊厳死を望むのかを説明し、理解させ、納得してもらうためには、まずアリア自身がラモンの内面に深く踏み込んで聴き取り調査をし、その気持を理解しなければならない。

そんな目的で始めたアリアのラモンへの聴き取りだったが、ラモンの内面に入り込むにつれて2人の間には明らかに男女の愛情が……？ しかし、アリア自身の病も重いもの。やがてアリアは発作で倒れ、弁護士としてラモンのために闘うことは不可能となってしまった。

ラモンが書きためていた詩や文章の出版を勧めたのも、このアリア。そんなアリアは、ラモンからの手紙に力を得て、再びラモンとともにする出版のための作業に生き甲斐を見出した。そして遂にラモンの尊厳死に協力するばかりか、自分自身も尊厳死の途を選ぶことを決意した。そして、2人はその実行日をラモンの本の出版が完成した日と約束した。しかし……？

面白いのは、テレビで観たラモンの姿に感動したと言って彼に会いにやってきた女性ロサ（ロラ・ドウエニャス）。当初ロサには、ラモンの尊厳死を求める気持など毛頭理解できなかったが、ラモンと交友を重ねていくうち、少しずつ……。アリアに魅かれているラモンを見るのが辛かったロサだったが、ラモンへの愛情をまっとうすることは、夫の説得に応じて一度決意した尊厳死を中止したアリアにかわって、自身がラモンの尊厳死を手助けすることだった……。そして遂にロサは……？ こんな微妙な女性の心理をロラ・ドウエニャスは見事に演じている。

ハーレムのような……？

「なぜ、いつも微笑んでいるの？」という質問に、「他人の助けに頼って生きるしか方法がないと、自然に覚えるんだ。涙を癒す方法を」と答えるラモン。この映画では50歳を少し超えた年頃のラモンは、いつも微笑みを浮かべながら話をしている。とくに、家族や愛するフリアと話すときのラモンのやさしい話ぶりは誰がみても素敵なもの。しかし、ラモンのこの答えを聞くと、その言葉の重さに健全人はビックリするはず。

長い間ラモンの世話をしてきた兄嫁のマヌエラは、次々と女性客が訪れるラモンに対して、「まるでハーレムのよう」と表現したが……。

興味深い論争

ラモンの尊厳死をめぐる興味深い論争の第1は、ラモンと同じ障害を負った神父とラモンとの論争。テレビ上で尊厳死を訴えているラモンに対して神父は反論し、さらに「ラモンが死を望むのは家族に愛情がないからだ」とコメントした。神父の主張は完全に宗教家としての立場にもとづくもの。

これに対してラモンは、「宗教は、人が生きることや死ぬことに対してどんな貢献をしたのか」と猛然と反論した。さらに、兄嫁のマヌエラは、神父の上記コメントに対して、「あなたがテレビで言ったことは、一生忘れない」と猛反発！ 2人の論争の論点は次々と広がっていったが、結局は決裂！ そりゃ、当然。しかし正直なところ、私にはどちらの主張が正しいのかわからない……。さて、あなたは どう思う？

第2の興味深い論争は、ラモンの兄ホセとラモンとの間で交わされる、人間が生きていくということについての素朴な論争。ホセの考え方はあくまで、「人間はとにかく生きていくものなんだ」「自分の意思で死を選ぶなどということは、あってはならないことだ」という単純そのもの(?)の考え方で、理屈というよりは信念というべきもの。だから、正確に言えば論争ではなく、価値観のぶつかり合い。ホセは、兄の権威を利用して(?)ラモンに対して生きることを迫るが、残念ながらそれは、ラモンに対しては全く説得力のないものだった。

尊厳死と安楽死

日本では、安楽死の可否についての議論は一般的に知られており、法律論としても一定の到達点に達している。しかし、尊厳死についての法律論はほとんど展開されていない。したがって、尊厳死を法的に支援する団体があることをこの映画を観て私をはじめで知ったというのも、あながち不勉強のせいではない……？

ちなみに安楽死のうち、①「非自発的」ではなく、患者の「自発的」意思による、②「消極的」ではない、「積極的」安楽死について、日本の代表的判例である東海大安楽死事件判決（横浜地裁平成7年3月28日）（判例時報1530号28頁、判例タイムズ877号148頁）は、次の4つの要件を必要としている。すなわち、

- ①耐えがたい肉体的苦痛があること、
- ②死が避けられずその死期が迫っていること、
- ③肉体的苦痛を除去・緩和するために方法を尽くし他に代替手段がないこと、
- ④生命の短縮を承諾する明示の意思表示があること。

この映画におけるラモンの場合、明らかに②の要件を満たしていないため、日本では絶対にその安楽死は認められないはず。したがって、この映画がテーマとして描く、他者の支援によるラモンの積極的尊厳死（安楽死）も法的には認められないことが当然である。そんな私の弁護士としての知識によれば、この映画の最後のシーンは衝撃的！ すなわちそのシーンは、多くの人たちが、多くの分断された作業に参加し、その積み重ねによって、人間が死ぬのに必要な量の青酸カリが入った1杯の水が用意され、これをラモンが飲み干すことによって尊厳死が完成するというもの。しかし、ホントにこんなことができるのだろうか……？

最優秀外国語映画賞の受賞も当然！

第77回アカデミー賞授賞式は、ロサンゼルスで2月27日に行われ、『海を飛ぶ夢』が他の候補作『As It Is in Heaven』『コーラス』『Downfall』『Yesterday』を退けて、見事「最優秀外国語映画賞」を受賞した。この作品のテーマの難しさを考えると、よくぞ受賞できたものと思うが、これはある意味では、アメリカのアカデミー賞の価値（良心）の表れかも……？

2005(平成17)年3月4日記